

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 73



アングル

「農村と都市の交流による地域活性化への挑戦」

群馬畜産加工販売農協連常勤理事販売本部長／黒澤 賢治 …… 1

特集

『ツーリズム 農村と都市の交流』

しまなみグリーンツーリズム

今治中央地域農業改良普及センター伯方支所／赤尾 道子 …… 2

次世代の観光農業へ挑戦する 久万町／竹森 洋輔 …… 4

出合いを大切に、自分も楽しく 内子町／森長 禮子 …… 6

風の子農業小学校の子供たち 野村町／宇都宮重実 …… 8

重要文化財を活用し、羽ばたくやかたグループ 宮城県名取市／洞口ともし ……10

論談—まちづくり—

地域活性化のオルタナティブ

—グリーン・ツーリズムの理念と意義—

東洋大学社会学部教授／青木 辰司 ……12

キラリ光るまち

安心院発全国へ

大分県安心院町／宮田 静一 ……14

引き算型まちづくりの事始め（四）

内子町／岡田 文淑 ……16

トークナウ

農村と都市との架け橋をつくる

松山市／山崎 梨恵 ……18

公民館活動をとおして

宇和町／松本 和美 ……19

まちづくり考

「まちづくり活動」への視点

（財えひめ地域政策研究センター統括部長／脇 安生 ……20

研究員レポート

夕日学入門

池田 大作 ……22

「ふるさとづくり2002」に参加して

奥山 清司 ……23

ツーリズムで農村・農業を知る

橋岡 勝一 ……24

MY TOWN うおっちゃんぐ 歩キ目デス&足ラテス

近代化遺産シリーズ「佐田岬の青は緑錆か!？」

岡崎 直司 ……26

媛のくにフラッシュ

……………28

information

まちセンからのお知らせ ……29

特集

「ツーリズム 農村と都市の交流」

「ツーリズム 農村と都市の交流」

ここ数年、農村地域の自然や暮らし、文化に心のやすらぎを求め、農作業を体験したり、その土地ならではの食を味わいに訪れる都会の人たちが増えていきます。農村の人たちにとっては当たり前だと思っていることも、都会の人たちにはそれが非日常で、不思議な体験になっています。

また、今春からの学校週五日制は、「休日を親子で農村の生活を体験する」というちょうどいいきっかけになるのではないのでしょうか。

これからの農村の地域づくりを考えていく上で、都会の人たちとの交流、ネットワークは重要で、ツーリズムは農村を変える有効な方法だと思います。

今回は、いろいろな形でツーリズムを推進、実践されている方々に登場していただきました。ツーリズムで地域に新しい風を。

（編集者 橋岡）

表紙の言葉

♪緑の森の彼方から
陽気な唄が聞こえましょ
あれは水車のまわる音
耳を澄まし聞こえる場
所は、内子町。田植え頃
になると、コトン、コト
ンと、水田用の水車が回
っています。

石畳地区には、地域の
人による手づくりの大き
な水車が三つ、ギーゴト
ン、ギーゴトンと森にこ
だましていました。

水引き、粉碾き、穀物
を搗き、水車は昔、山里
の生活に欠かせなかった
大きな道具。

内子町大岡地区の水車

柳原 あや子



農村と都市の交流による 地域活性化への挑戦

群馬畜産加工販売農業協同組合連合会

常勤理事販売本部長 黒澤 賢治

(前 JA甘楽富岡営農事業本部長)



明治七年、協同組合運動の原点と言われる「上州南三社」は、群馬の中山間地の農業を支える基幹作目であった。「養蚕」を中心に発足。更に明治五年には、「近代産業の基礎を築いた官営富岡製糸工場」が創設されるなど、地域は国内最大の「シルクのまち」として成長を続けてきた。養蚕業の補完作目としての「蒔蒨こんじやく」も、国内最大の産地として名声を博す。いわば「二大作目」に特化され、明治・大正・昭和の三代目で「農業」をベースにした、加工・製品製造のまちとして大いに繁栄し、まさに「シルク・蒔蒨の企業城下町」と言われ、単品型生産体系が定着した。

昭和五十四年、養蚕・蒔蒨の販売高は八十

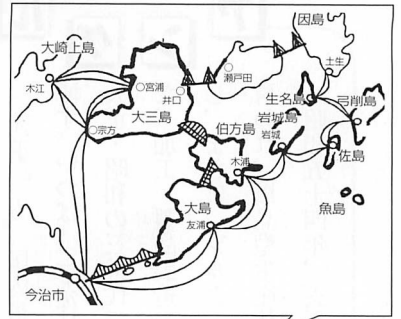
億円を超え、これらを原料とした工業製品は地域No. 1の位置を占め、「米の生産できない農業地帯」を支えていた。しかし、昭和五十九年生糸の輸入自由化、更にはガットウルフアイルランドによる蒔蒨の関税化等により、市況は生産原価を大きく下廻り、養蚕は十五年間程度でピーク時の百分の一・蒔蒨も五分の一度に激減し、農地の荒廃化と他産業への農業人口の流出が続いた。加えて、製糸工業・織物工業・蒔蒨原料加工業も、生産崩壊により相次いで操業停止となり「主なき企業城下町」へと大きく様変わりした。

平成六年三月、地域農業の再構築と「農業を基軸にしたまちづくり」をめざし、JAは広域合併しJA甘楽富岡が設立され、一市三町一村の行政支援、更には県プロジェクトとリンクした「ベジタブルランドかぶの里農業振興計画」を樹立し、「農による地域再生運動」はスタートした。

地域農業を「単品専的産地」から「少量多品目型産地」に構造改革するため、「管内農業総点検運動」を実践し、地域内で長い歴史の中で育成されていた百八品目を発掘。わずかに残った専的農業者・中高年・女性・新規

参入者など多様な担い手との「チャレンジ21農業プログラム」投入による活力ある生産活動は、直売所をベースに、都市の消費者に「おすそ分けの心で旬感野菜をお届けしよう」を合言葉に生産活動を展開。三十四名の会員でスタートしたこのシステムは、千三百五十名余の会員とトレーニングセンターとしての直売所（食彩館）二ヶ所、首都圏二十五ヶ所に設置したインショップ店（大手量販店・生協店舗内直売施設）へと拡大し、まさに都市生活者の「家庭菜園」としての役割を果たしつつ、三百六十五日「朝獲り直送野菜」を提

供しつづけている。食に対する不信が渦巻く中、「新鮮・安心・安全・賞味」は当然のこと、「だれだれさんが生産した農産物」まさにトレーサビリティによる「信頼関係」がより強固になり、生産体系は更に深みと幅を拡大しつつある。ついには「第二のふるさと宣言」をした消費地と「姉妹都市締結」。さまざまな交流が継続している。まさに「農業を基軸にした都市との交流」が整然とオペレーションされている。



しまなみグリーンツーリズム

今治中央地域農業改良普及センター伯方支所



赤尾 道子

普及センター管内は愛媛県北部に位置

し、越智郡島しょ部九町村で構成され、総世帯数約一万三千戸、人口約三万人で、主な産業は造船、海運、農林水産業等である。平成十一年に西瀬戸自動車道(しまなみ海道)が開通し、観光客の増加で農漁業にも様々な影響が出始めている。そこで平成十二年に、九町村でしまなみグリーン・ツーリズム推進協議会を結成し、ひと、もの、立地を生かしたグリーン・ツーリズム活動を展開している。

体験学習計画の樹立と実践

しまなみグリーン・ツーリズム推進協議会が発足して、グリーン・ツーリズムを推進していくための基礎学習を、女性組織の活動の中に取り入れていった。

①グリーン・ツーリズム研修会

グリーン・ツーリズム研究で著名な秋田県立大学短期学部の山崎光博教授を迎

え、リーダー研修会を開催した。

②視察研修

先進地を訪れる研修も実施した。京都の美山町で茅葺きの屋根を残した景観を売り物にした民宿や行政の取組み、大分県の安心院町では会員制の民宿や町ぐるみでの推進状況、福岡県の大道谷の里は自給農産物を生かした郷土料理中心の農家民宿などを視察して情報を収集した。

グリーンツーリズムマップ作成

培った技術を活用して全国の人々に楽しんでもらおうと、体験学習を計画することにした。計画にあたって、体験は生活研究グループが一番自信を持っている技術で、人数・期間はグループ員達でよく話し合い無理をしないこと、また、受け入れ金額はボランティアでないの採算の合う金額にするようにと、指導した。しかし、体験内容を決めたり、金額を

決めたりするのに時間がかかり、来た人に喜んでもらえばいいと考える人が多く、儲けに繋がるような価格設定ではなかったが、まずは取り組むこととし、三十二の体験学習計画が出来上がった。

体験内容は、十七件のふるさとの味体験(イギス豆腐づくり、石花汁づくり、いも餅づくり等)、十二件の収穫体験(みかん狩り・魚釣り等)、四件のくらしの技体験(切花のアレンジメント等)である。

しまなみの景観や観光内容を盛り込み、三十二の体験交流をメインにしたどこにもない『グリーンツーリズムマップ』を作成、十三年度から体験交流を始めた。

十三年度体験型交流の結果と成果

十三年五月から体験交流を実施した結果、しまなみグリーンツーリズムマップから、四十八体験(ふるさとの味体験三

十件・くらしの体験三件・収穫体験十五件）、四百五十九人との交流が行われた。体験者にアンケート調査を実施した結果、体験内容には十分に満足しており、また来たい、他の人にも知らせたいと答えているため、リピーターとしての可能性に期待が寄せられる。

また、体験を受け入れた女性達が、生き生きとしてきている。例えば、昨年みかん農家は価格低迷に泣かされた。みかん狩り体験を受け入れたグループでは、体験者から島のみかんは美味しいとたくさん買っていただき、おまけに箱注文まで来た。交流する楽しみ、所得向上にも繋がる楽しみが、みかん栽培意欲も掻き立てている。

十四年度百体験メニューで実施

平成十三年度は生活研究グループが中



押し花のコスター作り（吉海町）
内子町の人と交流

心で体験学習に取り組んだが、十四年度は、管内の女性三組織（グループ・J A 女性部・漁協婦人部）と、中核農業者や漁協関係者が参加して、体験学習を計画した結果、十三年度の三倍の百体験メニューにまでふくらんだ。漁業者も加わったことで、いっそう島らしい体験内容となった。

☆ 修学旅行生の受け入れ

東京都江東区立深川第四中学校の三年生百七十一名、先生十五名が、五、六名の班に分かれ、八町村で三十体験を実施した。受け入れ側は、中学生とのファックスのやり取りで前準備をし、子供や孫が帰ってくるような気持ちで迎え入れた。一番心配だったのは天候で、前日は濃霧のため船が欠航したこともあり、朝一番に空を見上げた。東京からどんな中学生が来るだろうかと心配していたが、おとなしい大変素直な生徒たちで、三十種類の交流ができた。

反省として、接待をし過ぎないこと、もっと子供たちを自由に体験させることが大切であるとの話があった。生徒と先生からのお礼の手紙は、受け入れた人たちの思い出作り、交流の楽しさへと広がった。

五月三十日にも大阪の羽曳野市立高鷲

南中学校の修学旅行生を受け入れ、同じような思いをした。

しまなみグリーン・ツーリズムの

課題と展望

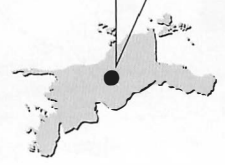
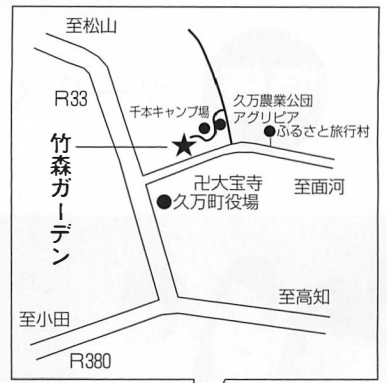
グリーン・ツーリズムの意味も充分でなかったグループ員が、研修を重ねていくうちに、消費者との交流活動を楽しみにするまでに変化していった。

ツーリズムの内容を充実させていくためには、農家民宿・農家レストラン・販売施設（直販や宅配）・農業・農村体験や学習のための施設・自然とふれあい歩き回るための道路やサイクリングロードの整備も必要であり、現実化しつつある。農漁業者が、女性が、高齢者が、農村での役割を見出し、輝き、そのことが若い世代の関心と呼び、後継者に新しい道を開くことを期待したい。



竹とんぼづくり体験
大阪の中学生が修学旅行で体験

次世代の観光農業へ挑戦する



竹森ガーデンの経緯

竹森ガーデンの歴史は昭和三十三年、高知県池川町からの入植に始まりました。葉煙草の栽培から始まり、それから大根を栽培し同時に漬物などの加工品も手掛けました。スーパーとの十三年間に渡る産地直送販売にも取り組み、消費者と生産者との繋がりを構築して来ました。現在は、『りんごとおぶどうとワインの果樹園』というフレーズで、多くのお客様から親しみをいただいています。

出会いから新しい挑戦へ

私は高校卒業後、長野県で三年間、落葉果樹の栽培技術を学びました。長野県の農業は、私の農業ビジョンに影響を与えています。りんごやおぶどうの栽培方法はもちろん、観光資源の有効利用、グリーン・ツーリズムの展開方法など多くを学



久万町 竹森ガーデン

竹森 洋輔

びました。

平成八年三月に家業を継ぎ就農しました。長野県で取得した技術や感性を活かしてオリジナリティーあふれる果樹園経営をしようと希望を抱いていました。当時、父は五十四歳。現役バリバリです。仕事のことで度々ぶつかりました。私は

長野県で学んだ果樹栽培の理想を語り、父は現実を教えてくださいました。理想と現実が行き交う中、この土地で果樹栽培を志す苦勞を痛感しました。まず気象条件の違いという壁がありました。ここは雨がが多く、果樹栽培に向いているとは言い難いものでした。この雨を効率よく排水できるかが重要でした。新たに果樹園を設計する際には、大型重機で転地返しを行い土壌の改良に努めてきました。今では、降水量の多い地域では栽培が難しいと言われる醸造用ワイン品種も手掛けられるようになりました。

私は、長野県で出会った友達の一言でワインに興味を持ち、醸造用ワイン品種の試作を始めました。『自分の作ったぶどうでワインを楽しむ』ぶどう農家であるからこそやりたかったのです。

竹森ガーデンでは、平成元年からりんご・ぶどうの樹のオーナー制度に取り組みで来ました。お客様にそれぞれの樹を買っていただき、一年間を通して収穫などの作業体験をもらうシステムです。ワインづくりも、このオーナー制を取り入れることでお客様に新しい作業体験が提供できると考えました。

私のワインにかける思いを語り、賛同していただける会員を募ってきました。今年四月、今まで構想を抱いていた『ワインオーナー倶楽部』が始動しました。現在、三十五組のお客様がいます。

コンセプトは、会員自らが体験し作り出すことです。ワインづくりの原点はぶ



「ワインオーナー倶楽部」
会員自らがワイン用ブドウの苗を植える

どうづくりです。もちろん苗は会員自らの手で植えていただきました。植樹という作業体験を通して、新たな楽しみができると考えています。

これは、私にとって新しい挑戦でもあります。三十年近く続けてきた味覚狩り観光農園のスタイルも時代の変化とともに変わっていかねければなりません。収穫体験だけでなく果物が育つ過程を伝えていかねければと強く思い始めました。体験を経て感動を生み喜びと変わる、そんな観光農園にしていく必要があると考えています。

体験から生まれる感動を大事に

近年グリーン・ツーリズムが、全国各地で取り上げられるようになりました。都会の方々は農村に何を求めにやってくるのか？農村はどのようなことに答えられるのか？この果樹園の立地条件また地域の風土を飾ることなく、都市の方々に情報発信していかねければならないと考えています。

久万高原の四季ははっきりしています。夏は涼しく過ごしやすい環境です。しかし、冬は極寒で非常に厳しい自然条件を兼ねそろえています。これが果樹園のありのままの自然です。日差しの強い時は吹く風を心地よく感じ、また寒さを感じれば暖を取り、火の有難さを感じることもできます。これは、すべて体験から生まれてくる感動です。ここを一番に大切にしていきたい、伝えていきたいと思えます。

グリーン・ツーリズムが広がっていけば、都市の方々は少なからず農産物も栽培するでしょう。農作物を育てる難しさ、農薬の必要性、農産物をスーパー等であるに安く手に入れていたのかという部分に気づくはずですよ。そうすれば自ずと感動・感謝が生まれることでしょう。

また地域の方々との交流も感動体験を呼び起こす材料となるでしょう。その一つ一つを大事に伝えていくことが、観光農業の果たす役割だと思えます。

挑戦もまた体験から生まれる

コミュニティビジネスという言葉をよく耳にします。地域通貨、昔の結などもその一つだろうと思います。農村では過疎化が進み、集落営農へ移行する必要が出て来ました。同時に後継者不足が叫ばれると、農地の維持のためにみんなの力や助け合いが必要です。今の農村の現状こそ都市の方々に情報発信をしなければなりません。コミュニティビジネスはローリスク、ローリターンだと言われます。そこには感動や達成感など、お金では買えない気持ちが生まれて来ます。体験を通してこの価値観を見直す場を提供したいと考えています。

私の夢は限りなく続いています。一年に一度の果物づくり。挑戦できることはすべてやってみようと思います。一生懸命で思い通りに果物を作り出せるのはたった一度くらいだそうです。私に農業を教えてください。『夢は見えてくださった方の言葉です。』夢は見るもの！計画は立てるもの！目標は実践するもの！この言葉を心の中に置き、前向きに取り組んでいこうと思います。

次世代の観光農業のあり方は、農業の魅力を感じてもらいながら伝えていくことにあるのかもしれない。

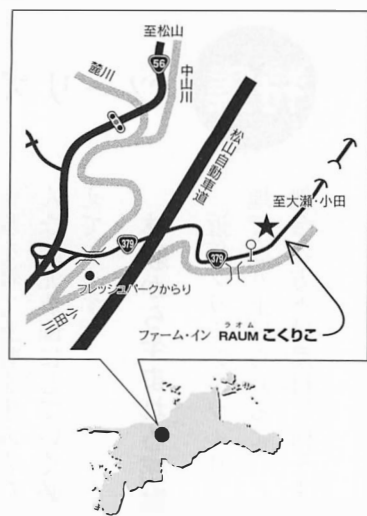
出会いを大切に、自分も楽しく

内子町 ファーム・イン RAUM 古久里来

森長 禮子



古久里来の誕生



子供たちが社会人になり、自分を振りかえつてみた時、これからの生き方を考えてみました。「心豊かに年を重ねるためには、どうしたらよいだろうか。今まで夢としてとらえてきたことを実現してみよう」と。そこで、夫が知人に誘われてヨーロッパのアグリツーリズム（グリーンツーリズム）のスタディツアーに参加し話してくれたことや、これからの農村のあり方等を参考にして、ファーム・イン・RAUM・古久里来が誕生しました。私一人で何が出来るかという不安もありましたが、「とりあえず一歩踏み出してみよう。何とかなるさ…」と思ったのです。

「RAUM」はドイツ語で空間、「こくりこ」はフランス語でヒナゲシのことです。与謝野晶子さんの歌「ああ皐月フ

ランスの野は火の色す 君も雛罌粟我も雛罌粟」の雛罌粟から名付けました。ヒナゲシの咲き乱れているところで、鉄幹とのんびりうたた寝をしている様子を歌ったものだと思います。

「古久里来」は、田舎のイメージで当て字です。おいでになった方が、この空間を自由に使うてくつろいでいただき、リフレッシュして欲しいとの気持ちを含めて名付けました。平成七年の八月オープンです。

古久里来の取り組み

グリーンツーリズムというのは、「農村で休暇を」と表現されており、農村と都市の交流ができる場を作りたいとの思いもあります。今まで色々な人との出会いがありました。外国からのお客様、田植えをしたいという若者達。稲の成長を見に訪れてくれたり、稲刈りをして、「こ

れほど大変な思いをして作っているのだから、お米を大切にしないとね。」と、ステキな汗と共にいい言葉を残してくれました。また、地域の人たちの協力を得て梨の袋かけをしたり、自分の名前を書いてつけた袋を見つけ収穫したりして、農家の人も都会の人も喜んでくれる出会いの場となりました。

先日、「わらぞうりづくり」に挑戦しました。十名ほどの若者がやってきて、「おばあちゃんこれからどうするの?」「おばあちゃん、花緒は?」「おばあちゃんの出番がいっぱいです。一足ずつできあがり、にぎやかにお茶の時間です。みんなの笑顔が光っていました。お年寄りの知恵と技術をいただきましたながら、新緑の山々を違った目で見て、農村の良さを感じてもらったり、若者から元気を分けてもらったりできる交流は、これからも続けていきたいことのひとつです。

人が来れば地域に活気が生まれ、美しくなるのです。やはり、誰か来られるとなると、掃除もするし、ちよつとおしゃれもします。そして、新しい風がふき、農村も捨てたものじゃないなと、自信を持って若者を受け入れられるようになって思っています。

地域がかがやく

いろいろな体験メニューを考えるのも私の役目です。都市の人たちの興味のあることに焦点を当て、毎年ちよつとずつ変わったことを企画することも大切なことと思っています。



わらぞうりづくりを体験
おばあちゃんの出番です!

泊まれた人と、地域の人との交流

イベントだけでなく、お客様の知識と経験を分けていただいています。外国からのお客様の時はそれぞれのお話などを聴かせていただき、小児科医の方の時は赤ちゃん相談室、料理の達人の時は料理講習会、押し花の先生の時は押し花教室、夜遅くまで時間を忘れて、地域の人たちと楽しんでます。コミュニケーションホールになればとの思いがあります。

宿泊棟のこと

宿泊棟は、円柱の建物が二つくついでいて、部屋にはベットが二つあるだけです。テレビも電話もありません。ただプライバシーは守りたいとの思いで、各部屋に、トイレ、洗面所、シャワーはつけました。私一人でまかなえることが基



外国からのお客様もあります。

本なので、定員八人の小さな宿です。

都市の方たちが旅をする時、何を求めていらつしやるのか。それは、非日常ではないかと考えました。のんびり過ぎていく時間を楽しんでもらいたいし、自分を見つめ直す時を持っていたきたいと思っています。部屋においてあるノートに、「テレビがないおかげで、夫婦の話がはずみました」「結婚記念日です。時間を忘れていい記念になりました。今度は子どももつれて…」というものや、「おばちゃんのごはんおいしかったよ」という子どもさんのたどたどしい字もありました。嬉しい言葉です。

おわりに

「自分が楽しくなければ、来られた方たちも楽しくないはず」と、自分が楽しいことを次々しています。お金には代えられない宝物を、いっぱいいただいています。いろいろなところから訪れてくださるお客様との出会いを大切に、いつも同じでなく、少しでも新しいことをと自分に言い聞かせ、慣れではなく、初心を忘れずにいたいと心がけて居ります。「ふるさとが出来た」と思っていたら、「ただいま」の声が増えますように…。

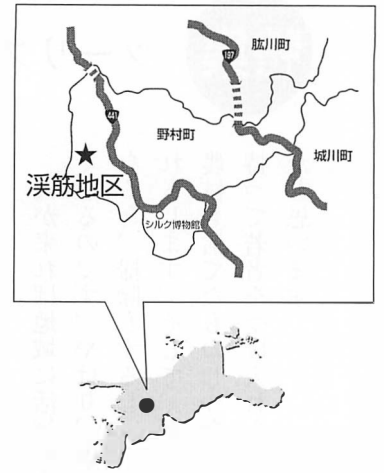
「おかえりなさい!」

風の子農業小学校の子供たち



野村町 風の子農業小学校

校長 宇都宮 重実



日曜日の朝、溪筋では見慣れない車が公民館へ集まって来る。ニコニコしながら小学生の子供たちが下りて来る。その後で、お母さんが子供を頼もしそうに見つめながら「おはようございます」と声をかける。

今日は農業小学校の開校日。子供は、今日を待っていたかのように駆け寄って来る。私にとってもこの上もなくうれしい。「おはよう」と声をかけて一日が始まる。お母さんたちも来てよかったという顔。毎月作業内容は違うが、楽しみのようである。

開校の経緯

農業小学校は、平成九年四月、十家族の参加で開校した。今年で六年目延べ七十五家族が参加した農業小学校の設立の契機は、自然体験スクールを当町の社会教育課が主催し都市と農村の交流を開始

したことにつながる。「この活動をより拡大し、都市と農村の交流を広げたい」その思いが一人の役場職員にあった。

農業小学校の先進地を訪ね、活動の内容を研修し、どこで実施するか検討を重ね、溪筋地区で活動している私が代表になつて「有機農業を育てる会」のメンバーとの話し合いを行った。農業小学校はふるさとが大好きで自分たちの想いを農村の生活を都会の子供たちに伝え、農業の体験をさせていくこと、自然の中で子供らしさを身につけていくことなどという考えが一致して、教育に全くの素人が取り組むことになった。

こうして、子供たちに、農作業や農村滞在の経験を通じて、自然の不思議、作物を作る喜び、自分で作ったものを食べる楽しみ、農村に暮らす人々のやさしさなどを体験してもらうことを目指した活動を始めることになった。

農業体験の中の子供たち

農業小学校には、「有機農業を育てる会」のメンバー七人と地区の人たち若干名がスタッフとして参加している。

四月から十二月まで月一回開校し、野菜づくりを中心に稲作や自然体験を実施している。自然体験はタケノコ掘り・山菜採り・川遊び等、農作業は野菜の苗植・種まき・田植え・草取り・稲刈り・野菜の収穫等、農村で行われているすべてである。稲作はアイガモ、野菜は有機栽培で行っている。

都会のお母さんも子供たちもせっせと労働に励んでいる。どちらかと言えば、子供たちよりお母さんの方が熱心のように仲間同志おしゃべりしながら、結構楽しそう。子供たちはしばらくすると川の方へ行っている。本来母も子も自分で作物を作る機会の少ない都会の人たち。現代



もちつき



田植えを体験



大根抜きは面白い！

っ子的ために農業体験をさせることを目的にしていたのに、子供は川遊びが気に入ったよう。でも、イモを掘ったり、大根を抜いたりするのは面白いようだ。「お母さん、これジャガイモ」と見せる。

開校日の昼食は、女性スタッフによる季節の料理で、田舎でしか味わえない。これが好評で、「一番の楽しみ」と言う。また、「農業を知らなかった私たちが人の暖かさや自然の豊かさに触れることができ、自分の手塩にかけて育てた物が食べられることに幸せを感じる」とも言う。

時には、私方に何家族か泊まり、参加者と地区の人たちとお酒を飲みながらの交流がある。こんな関係が都市への産直活動にもつながり、「きれいな山の水で作ったお米は安心できるし、うまい」と言っている。

お母さんたちは、「溪筋地区にいる時の子供たちの生活は家では絶対に見られ

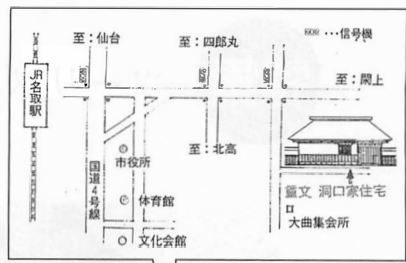
ない」と言う。何も忘れて無心に遊んでいる。溪筋で初めて出会った子供たちは本当に仲良くしている。お母さんたちも、この光景を満足そうに見ている。

帰りの車の中で「今日はカエルを捕まえた。明日も来ていろんな物を捕まえようね」という子供もいると言う。溪筋が気に入った様子。「子供には今日一日好きなようにさせるんだ」と言っている。

昨年の稲刈りの時、始めは鎌で一生懸命稲刈りをしていたのに、一人がドロを投げた。さあ始まった。二人、三人と加わってドロ合戦。お母さんたちも誰一人止めようとしなない。服はドロだらけだが、何枚もの着替えを持って来ている。多分家では、「汚すんじゃないよ」と言っていると思う。私にもどう表現したらいいか分からないが、農業小学校へ来る親子のふれあいが大きく感じられる。

この農業小学校も、実施していく中でいくつかの問題点がある。子供たちに無理に農作業をさせることがよいのか。また一方では、参加してくれる小学生や親たちが溪筋に来てよかったと思ってくれるか。それが子供の将来へつながっていくか。新しい試みを模索しながら、農業小学校の発展を期したいし、地域の活性化につなげていきたい。

重要文化財を活用し羽ばたくやかたグループ



文化財を心の拠り所に

宮城県名取市は、仙台市の南隣で、山海に囲まれており、日本一のセリ・ミヨウガ、東北一のカーネーション、その他数多くの農産物が作られております。また、埋蔵文化財の宝庫でもあります。

私どもは、やや海岸寄りの仙台空港に車で五分の所、静かな田園地帯にあります。そのような環境の中、農業を営み、国の重要文化財である生家の屋敷を活用して、農家レストランたてのいえを開いております。

文化財の活用につきましては、祖先が残してくれた文化遺産をただ見るだけに終始せず、形が変われども、いろいろな活用方法があってもしかるべきで、そうすることが古き良きものを伝承していく一助になるし、地域の活性化の源にもなると思いました。それゆえ、多くの人が



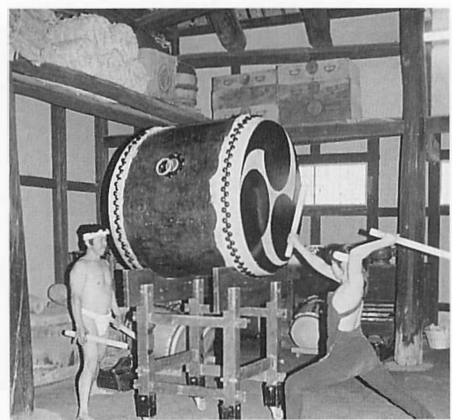
宮城県名取市 やかたグループ

代表 洞口 とも子

ちの心の拠り所にしたという願いがありました。

それで、まず私が所属している農産加工グループやかた（四人のメンバー）で、自分たちの作品発表会であるやかた祭りを行いました。目的は、農産加工販売と地域交流です。その加工の過程において、先人の創意工夫が今に受け継がれております。

そういう先人の残した素晴らしい地域文化を継承し、後世に伝承していく夢の実現もありました。しかし、四人のメンバーで現実化するのは至難です。それで、町内の各種団体に呼びかけ、企画構成はやかたグループ、主役として演じるのは町内の人たちということで行っています。たった四人に町内から五十人のお手伝い、三百人のお客様があり、お陰で地域の輪、都会との交流の輪が広がりました。それによって、さらなる活動意欲が沸



ムーンライトコンサート
和太鼓の演奏

き、さなぶり祭り（昔の田植えの慰労会のこと）で、現在は地域に伝わるいろいろな文化を紹介）、ムーンライトコンサート（お月見会で、琴、和太鼓、胡弓、パーカッション等のコンサート）、やかた祭り、年三回のイベントを組むようになりました。常にやかたグループは、地域の人たちと一緒に、文化財を拠り所に、都市との交流の輪を広げております。

農業・農村に対する理解を

その重要文化財の活用をしている流れの中で築き上げてきた「技術」、「人脈」、「特産物」、「歴史と文化」を生かし、農村女性の自立、地域への貢献、食を通しての消費者との交流をしようと思ってきました。それらの結果として農家レストラン、産直市、旬の情報館の開設になった訳です。

レストランの目的は、グリーンツーリズムの意味合いを認識し、ゆっくりと過ごし、心身ともにリフレッシュしていただくことです。そのために、一日一グループの完全予約制にしております。特長は、地域の旬の食材で、伝承料理二品、現代風にアレンジした料理、囲炉裏での魚の串焼き、そして日本建築の文化、建物の空間もお料理として召し上がっていただくことです。やかたコースと餅膳コースがあり、全十一品で二千五百円。

旬の情報館では、現在やかたグループに五人加わって九人のメンバーで、旬の情報発信地として、広く名取の農産物をPRしています。消費者と生産者との交流を通し、互いに農業に対する理解を深めることを目的とし、毎週土曜日午後二時から五時まで開店。お陰様で、囲炉裏

を開んで、「お茶飲んでいがいん」から始まって、地域のいこいの場、都会の人たちとのふれあいの場、談議・論議のコミュニティの場となっています。「うだから、昔のように循環型の生活をしていけば、環境問題なんか騒がなくてもいいのっしや」と、農家、農村のすばらしさを私たちより先に地域の人たちが話してくるので、産直市はすばらしい世界を作り上げております。

そのすばらしい応援でさらに大きな輪が広がり、平成十二年には量販店のイオングループジャスコ名取店から「当店では地場産品コーナーを設けるので、ぜひ旬の情報館にお願いしたい」と依頼がありました。私たちは他のグループにも話を



旬の情報館
文化財を活用して、名取の農産物をPR

し、ともに産直に取り組んだ方がより広く名取の農産物のPRにもなるし、地産地消の運動にもなると考えました。三グループ十六名でサンサンメイトを立ち上げ、去年の五月から新鮮、安全、安心、顔の見えるコーナーを設けていただき販売しております。

重要文化財での年三回の活用から端を発し、農家レストラン、旬の情報館、サンサンメイトと、やかたグループは地域の人たちの応援、支えによって羽ばたくことができました。

文化財を生涯学習の場にも

今後は、さらなる産直ネットワーク化を図り、地産地消の運動を展開するとともに、全滅寸前のハマボウフラを蘇らせる環境問題にも取り組み、できることであれば商品化まで進めていきたいと願っております。

また現在、宮城教育大学の協力をいただいで、いぐねの学校（小学生対象）を開き、いぐねの意味、重要性を解き、昔の循環型生活の勉強しております。将来、拠り所である文化財を生涯学習の場として活用できるよう、地域のみなさんとともに頑張りたいと思っております。

※いぐね…茅葺き屋根や瓦を守るための防風林、家の境界にある木々のこと。

それらは家を建てる用材、燃料となり、燃やした後の灰は洗剤や農地の土壌改良に使われた。

地域活性化のオルタナティブ

—グリーン・ツーリズムの理念と意義—



東洋大学社会学部

教授 青木 辰司

1. グリーン・ツーリズムの理念

日本にグリーン・ツーリズム（以下GT）が政策的に導入されて、ちょうど十年が経過した。リゾート開発が頓挫した当時、新たな農山漁村の活性化手法として提起されたGTであるが、まだまだ誤解や曲解が多いようである。

「GT研究会中間報告」によれば、GTとは、「都市と農村の相互補完・共生による国土の均衡ある発展を基本目標とした、『緑豊かな農村地域において、その自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動（農村で楽しむゆとりある休暇）』とされる。

ここでの「グリーン」には、単に「緑」や「自然」という意味だけではなく、「地上のすべての生命の尊重、資源の適正利用、あるいはすべての生物の相互関連の認識」という、環境保全や社会・文化の持続可能性の確保という意味も含まれる。また、「ツーリズム」とは、物見遊山の観光ではなく、様々な個人的な体験や交流を通して心身をリフレッシュする活動を意味し、そうしたライフスタイルの定着によって、新たな複合的な農村産業の振興をめざす理念と考えるべきであろう。

こうした基本的認識がないままに、「農村観光」や、「安かろう悪かろう」の農家民宿運動と捉えた「安上がり農村リゾート」づくりや、農業や自然体験メニュー合戦が目立つ。要は、リゾート開発の失敗から何を学び、自立的な農山漁村の活性化をどう考えるかである。

2. グリーン・ツーリズム・その背景と戦略的課題

西欧初発の理念と手法を日本にいかにか定着させるか。筆者は、イギリスの地域活性化手法の多様さと質の高さに魅入って久しいが、日本と共通する点も少ない。

全般的な農産物過剰基調、中山間地域の過疎化、耕地の荒廃化、環境問題の広がりという困難な課題の下で、多様な資源の有効活用による田園地域の多面的振興（カントリースайд・マネージメント）の重要な柱がGTの振興とその基盤整備であるが、日本でのこうした課題への認識は決して十分ではない。

戦略的課題は、①農家経済の多角化、農村経済の多元化、②農村文化の再構成、③農村の自然、準自然環境の保全・再創造、④地域経営の視点による地域連携体制の確立があり、その結果として農村地

安心院町農村民泊

「舟板昔話の家」 中山ミヤ子さん

「炉ろり端の交流が最高



域住民の地域への愛着や誇りを再創造することが重要であろう。

そうした農山漁村特有の課題を、都市生活者の価値志向の転換を基軸とした、対等で継続的な都市農村交流によって実現することに、GTの地域活性化手法としてのオルタナティブ（代替性）がある。

3. 日本型グリーン・ツーリズムのモデルー大分県安心院町

大分県安心院町は、日本型GTの最先端の実践地として高く評価される。「身の丈の実践」。安心院の実践の特徴はこの一言に尽きる。農村民泊（農泊）といわれる会員制方式は、町内三十戸以上のネットを作り、年間千人以上の宿泊実績までに至っている。

その秘訣は、農家を中心とした住民主体の「安心院町GT研究会」の主体的で多面的な実践力と、行政・議会の理解・後方支援という一体的取り組みにある。その実績が認められて、この春大分県では、農家での宿泊交流における規制緩和が全国に先駆けて行われた。

会員の積み立て金活用の「無尽方式」によるドイツ・アッカーレン村への海外視察者は、町長も含めて五年間で五十人以上に達した。交流活動の成否は外から

の視点の導入にかかっているが、国内外の先進地視察や実践者との絶えざる交流が、安心院の実践を支えている。

4. 新たな価値創造に向けて

「農」の多面的価値創造。BSE問題や不正食品表示問題や不正添加物使用等、食をめぐる安全性への不信心・不安感が高まる中、圧倒的多数の都市生活者にとって、今ほど便利で手ごろな食生活への問い返しがなされている時はない。農山漁村と都市を市場原理で分断するのではなく、「人間・生命原理」で繋ぐ試みとして、GTは大きな意義を有している。多くの人々が、その人なりに「農のある暮らし」を無理なく着実に自分のものとする。

「飽食の時代」といわれる「モノあふれ」の状況で、我々に課せられているのは、「生活の質」の向上と「心・命・環境」を中心とした価値観の創造である。

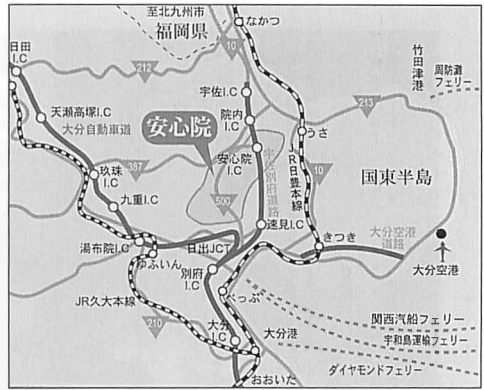
イギリス南西部サマーセット県のGT戦略の課題は、「秘密の共有」。感動的な交流を通して、決してマニュアル通りでない体験を共有する。こうした都市生活者と農山漁村住民との確かな価値共有をGTの基本的理念として踏まえて、着実な実践を広げたいものである。

安心院発全国へ



安心院町グリーンツーリズム研究会

会長 宮田 静一



グリーンツーリズムの

夜が明けた

ぶどうの灯を消すまい

画期的な展開とはこのことだろうか。あと十年はかかると思っていた農村民泊（通称「農泊」）をあるがままで始められる安心院方式をほぼ認めた形で、大分県生活環境部長名で出された「3・28グリーンツーリズム通知」。このことが朝日新聞の四月二日九州版に掲載されると同時に、インターネットで全国に報じられた。

全国のグリーンツーリズム関係者から何本も電話があったが、「やった」なんて気持ちはなく、ただ目の先が痛くなるほど泣けた。同居している子供が事の重大さを理解してくれて一緒に涙ぐんでくれ、余計泣けた。通知の出された三月二十八日が、苦しくも安心院町グリーンツーリズム研究会が六年前の平成八年に設立された日であるのは何とも因縁めいている。

当時周囲ではツーリズムが「二つのリズム、音楽関係ですか?」とか、「新しいのチューインガムですか?」とか、当会のキャッチフレーズ「心のせんとく」から新型の宗教とも思われていたのが、今となっては懐かしい。

私は、三十年前、隣の宇佐市からぶどうを作るために安心院町へ入植したぶどう專業農家である。当時安心院町では約四百軒四百軒のぶどう農家がいたが、ほぼ半減に近い状況になった。この運動の立ち上がるエネルギー源になっている「町のイメージぶどうの灯を消してしまるか」の精神が、皆の心を一つにした。七年目を迎える当研究会の特徴は、専門部活動が自主的に動いていることである。広報部をはじめ、アグリ、環境美化企画開発、農泊、そして全会員三百四十名の半数以上を占める応援団がすごい。このパワーなくして、今日は語れないだろう。

そんな中、特に全国に注目されたのが、会員制の、空いている部屋でスタートする安心院方式「農泊」だった。現在いつでも泊まれる家が十四軒あり、ごく自然にこの形が出来上がった。ただ、この形が日本で安心院しかないという現実には驚いた。(念を押しますが、「農泊」は研究会の中の一部の活動であることを明記しておきます)

過疎という言葉のない

ドイツを目標に

六年前、日本のグリーンツーリズムの今後は誰にも分らないと言われていた。そんな風ならと、気楽な気持ちでスタートしたのが本場の所である。

その年の十一月に無尽講方式（月々四千円を五年間かけ、行ける人から順番に行く）の第一陣でドイツに行き、激しいカルチャーショックを受けた。ドイツでは、一番奥地の農村にゴミ一つ落ちてなく、大きな看板もなく、電信柱も塀も洗濯物も目につかず、荒れた土地もなかった。まさかと思ったが、「過疎」という言葉がない現実には、今の日本に比べて、驚き以外何もない。

「それだ！」安心院のグリーンツーリズムの目標はドイツに出来た。人口五千人のフォークトブルグ市長に「どれ



安心院方式農泊



毎年ドイツに視察



高校生の受け入れ

くらいの方がこの運動に関わってますか？」と質問すると、何故そんな質問をするのと両手を広げ不思議そうな顔をして「一〇〇%」と言った。その時の市長の顔を今でも鮮明に思い出す。ヨーロッパでグリーンツーリズムの雇用は全雇用の一割を占める。この三十年で五%の経済成長を続けているとは信じられないけど事実である。

グリーンツーリズムの命

ネットワーク

安心院町のグリーンツーリズムに対する後方支援は並外れていると思う。平成九年の町挙げての「グリーンツーリズム推進宣言」、そして昨年四月に全国で初めて役場内にグリーンツーリズム係を設置したこと等、付かず離れずの絶妙のコンビネーションで、車の両輪のごとく回転していることは特筆すべきと思う。

年間を通じ「ふる里探訪の旅」、「リバーサイドウォーク」、「ドイツ語講座」、「全園薬こずみ大会」、「高校生受け入れ」等、数々のイベントを行っているが、何と言っても、人と人のネットワークに支えられている。メンバーに素晴らしい人が多く、この「いい人達との巡り合い」がグリーンツーリズムの醍醐味というか、このことが「人生」というのではなからうか。

大分県グリーンツーリズム

研究会設立に向けて

私たちは、今年四月二十七日、大分県下で五つの目標に賛同される団体にネットワーク設立を呼びかけた。なんと十五町村が呼応して、約二百五十名が安心院の地に結集し、大分県グリーンツーリズム研究会を立ち上げることが出来た。

安心院から大分県へ、そして全国展開の幕は切つて落とされた。グリーンツーリズムの質を落とさないためにも、愛媛県下にネットワークの構築を進めたい。それと同時に、出来ずなら、大分方式に早く追いついてもらいたい。国も早くドイツ方式に追いついてもらいたい。農村の復活は、日本に答えはないが、ヨーロッパの農村に答えが出ている。

引き算型まちづくりの事始め (四)

四月といえば公務員にとっては恒例の人事異動の月である。気分を一新し、新しい職場における仕事始めである。といっても、やり残した仕事の先行きを不安に感じる職員、住民と胸襟を開いてまちづくりとしての先行きに光明を見いだし、そのスタートにやる気をおこした職員、住民との煩わしい関わりからの解放感に浸る職員など、さまざまな思いで新年度の幕が開く。さあ今年こそはと気を引き締めて机に向かう。

まちづくりの視点から慣例化した人事異動を見ると、住民組織のほとんどが年度替わりとして新旧の役員が交代し、時には留任しながら、新年度事業計画を総会に諮る。一方では行政担当者との詳細な計画が策定され、新たな行動へと踏み切る時期である。組織の執行部と行政担当者はいずれの企画を立て、戦略を練る時期である。そんなときに担当者が辞令一枚で所管事務から外れていく。そして新任の担当者がやってくる。職員自体の人格や資質にもよるが、地域住民と膝を交えて築いてきたコミュニケーションは一から出直しである。後任者が不協和というのではないが、確たる支障がない限り、異動など考えるべきことではない。とはいっても、いまの組織の中には、一

つの職場に長居をするとなぜか煙たがられ、時には能力すら疑われる。そして張りすぎて、動かすことができない環境が生じてしまうことすらあるだろう。しかし、行政と住民は日々の付き合いの中で信頼を確立し、信頼の上に地域づくりが協働として存在する。行政に対する不信や不満はこんな所から生じているのかもしれない。

私の経験からすれば、四月一日は単なる節目にしか過ぎない。行政事務としては三月三十一日の次の日であり、前任者の事務が引継として流される。むしろ前年度内の積み残し事務の整理と精算が、出納が閉鎖される五月末まで継続される。時には完成を見ない実績報告書を作成しなければならぬ。また各種団体の総会にはじめて顔を出し、新任者ぶって着任の挨拶をしなければならぬ。「新任で、内容が分からず、これから勉強いたします。」と挨拶を交わしながら、あつという間に二ヶ月が過ぎてしまう。机に向かつて、前任者から事務の要領を聞けば処理ができる、直接住民等との関わりが薄い職場のことであればそれでよしとしながら、住民と一体にならなければ処理できない事務の場合はそうはいかない。

市など、所帯の大きい部署の中の少数の人事異動であれば、全体でのカバーも可能であろうが、弱小の自治体ではそうはいかない。地方自治体の事務の多くは、国、県の委任事務に倣っているのか、やたらと係の数が多い。町村の場合、一人でいくつもの係を所管し、それぞれに内容を把握しなければならぬ。これらの事務は、法律に基づく国民のための行政サービスとすればやむを得ない一面を持つている。前任者がやってきたことを模倣する以外に道がない。いつの間にか、上級官庁からの指導や指示にかかる事務に専念することが本務であるかのような錯覚すら覚えてしまう。そしてその事務の多さに辟易する。一度、直接、間接に住民サービスに直結したものがどれほどあるのか調べてみたいものである。因みに公文書と呼ばれるものは全て通し番号で受け付けられ、それぞれに回答や報告といった処理される。事務によっては指導という名の下での国、県の出先機関と思われるようなことだつて少なくない。

余談になつたので本題に戻ろう。町並み保存を学ぶために何度かドイツ、イタリアを訪れて気づいたことは、いずれの市も担当者が不変であること。彼らにはプロフェッショナルとしてセクションの中

に雇用されていること。そしてその道に精通し、専門家としてのテリトリーを保守している。当然定期的な人事異動などあり得るはずもない。ゼネラリストといえば聞こえはよい。多くの職場を経験することで、行政事務にかかる総合的な認識を得ようとするのが人事異動のねらいになっている、また特定の住民との癒着を防ぐとか、マンネリ化の打破とかいような理由でもって説明される。実態はもしかすればこうして根柢とは裏腹に、このこと自体がマンネリ化し、制度化されているように思えてならない。

こうした身近な職場の実態とドイツなどを比べたときの相違がよく分かる。どうも行政事務自体が、国を頂点にして市町村に向かって流れる我が国と、共和国としての地方自治体との根本的な違いの中にあるのであろう。従って多々ある行政ジャンルの中の個々のセクションでは、プロとして雇用されていることが当然のこととして考えられ、我が国のように一般行政職として包括的な雇用形態ではないようであるし、もし移動の必要が生じたときには、プロとしてのヘッドハンティングが存在することも耳にしたし、市町村間における交流や、対企業との交流だつてあるのかもしれない。

ただ、行政組織内のシステムを正すことは容易でない。人事異動の功罪については、職員の成長と活性化、そして住民サービスの低下に結びつかないだけの配りが求められることはないまでもない。若い職員がやる気を起こしてがんばっている姿は、まさに膨らんだ風船に喩えれば良からう。凜々と張った風船に針を刺せば当然パンクをしてしまうが、この穴を塞いで再び空気を入れても元のような張りが出てこない。人事異動によって一度やる気をなくした職員が復活することは、この風船と同様に膨らみきらない。

人事異動に使われる適材適所とは、何時の場合も語られる決まり文句であるが、この適材適所も人事を司る管理職によって、実に多様に解釈若しくは判断される。もしかすればこの言葉は、一定量成長した職員に対して言われる言葉かもしれない。職員は職分を通して育ち、住民との胸襟を開いた付き合いの中で成長する。地域づくり等における一定の成果が見え始めたときに、結果が適所になり、結果が適材であった事例は少なくない。職員とは、時には同僚や上司に感化され、時には地域住民に励まされるものである。また近年では情報化が進み、全国的なネットワークの構築の中でライバルを作りながら自らを磨くといったことだつて少

なくない。

ここまでを論じることは、ただの評論家にしか過ぎない。こうした言葉やりとりはこれまでも随分と論じられてきたことであろう。いま、職場を眺めていると、このように職員も地域住民も何とかして欲しいと願っているながら、全く改善されない。改善しようとする声すら上がらない。人事異動は、首長を頂点に三役と人事担当課長の専権事務になつており、誰もが口を挟むことを許さない仕組みにすらなっている。

職場には、人事異動に限らずいろいろなジャンルの不満因子がたくさんある。そしてその因子はこの職場に異動しても降りかかってくる。しかし、このことを大勢として眺めているとすれば、最早解決の目途は立たない。引き算型として考えたとすれば、こうして環境も負の要素であり、取り除く以外に道はない。心ある人、何とかしたい人が頑張らなければ・・・。ところが誰かが前に出て欲しい、自分は憎まれ役を買いたくない。もしこんな不安を考えるのであれば、自分の後ろには住民がいることを信じ、盾としてもらいたいものである。

「NPO法人(申請中)ネオ・クリエイション」は、情報開示支援事業を通して、農業の後方支援を行うNPO法人です。現在のところはまだ申請中ですが、もうすぐ設立される予定です。具体的な内容としては、農家の人手不足などの情報を一般会員、学生会員に開示することです。また、農村と都市との交流を活発にするために、交流会や勉強会などを開催します。

農村と都市との

架け橋をつくる

松山市

山崎 梨恵



今まで授業などで、農村は「高齢化が進んでいる」「耕作放棄地が増加している」という話を聞いても、実際にはどのような状況になっているかということがよく分かりませんでした。しかし、二回生の冬に実習で内子町へ行くことがあり、そこでユズの収穫や、草刈、苗植えなどの作業をしました。〃百聞は一見にしかず〃という言葉のとおり、実際に行ってみるとよく分かりました。急傾斜地に広

大なユズ園。話を聞くと、散らばって他にも果樹園があるそうです。それを高齢化した夫婦二人で管理されており、「もうやめよう」という話も何度かしたそうですが、それでもやめることができず、今も続けているということでした。それから数ヶ月経ったある日、現在、代表理事である竹下君から声がかかりました。「会社をつくろうと思うんだけど、一緒にやらないか?」と。「大学生が会

社を設立するなんて、できるわけがない」と、正直最初は思っていました。しかし、その内容はとても濃く、私の考えにも一致するところが多くあり、不安は残ったままでしたが、その会社の役員になることに決めました。

会員構成は、農家会員、一般会員(農家以外の一般の方)、学生会員、賛助会員となっています。現在は学生会員が最も多くなっており、これからは一般会員

の方も広く募集して、大人も子供も農業・農村に興味を持ってもらいたいと思っています。

また、農家には様々な農家の方がいます。高齢化で悩まれている方もいますし、これから頑張っていこうとしている方もいます。農作業は、一年間を通して、一定の作業ではありません。そこで、収穫の時など、一時的に起こる人手不足を解消しようというねらいもあります。

私たちの仕事は、農村との掛け橋をつくることです。この活動を通して、多くの人に農業・農村に興味・関心を持つきっかけを作っていきたいと思っています。農業・農村で起こっていることは、私たちの〃食〃に関わることでもあります。農村へ行って、実際に農作業体験をすることによって、農業の発展や農村の活性化に対して自分ができることを見つけたいと思っています。そしてまた、私自身も、これらの活動を糧として、自らの方向性を見つけ出していきたいと思

宇和町で毎日元気に楽しく過ごしています松本です。どうぞ、よろしくお願ひします。

さて、私は町の職員で、公民館主事として異動したのは今から三年前。今では、とても良い経験となる恵まれた年月。現在、今年の四月の人事で、教育長部局から町長部局に異動となり、公民館で培った人との温かい繋がりを胸に、企画商工

公民館活動をとおして

宇和町 松本 和美



れない。でも、最後にはとても素敵なたくさんの笑顔が見られる、そんな公民館活動が楽しく、誇らしかった。特に地域の人たちと計画し実施した事業に関してはおおさらである。

人と人との繋がりは不思議で、これから先も会うであろう人はいても、この先一瞬にして最初で最後、そう云う巡り合わせの人もあるだろう。そんな関係は特

課に席を置かせていただいている状況である。

それにしても、この公民館在籍中には、今までに無かったであろうと云うくらいに、「喜怒哀楽」の激しい三年間であった。本当に（苦笑）。さつきまで喜んでいたりと思えば、突然哀しんだり・・・もちろん、その逆もありで、一年一年があつと云う間だった。一つの事業を行っても、最初から最後までずいっと笑顔ではい

にこの公民館では多く、後で繋がりの修復をしようと思っても、人それぞれが感情を持つての場合は難しい場面が多い。

私は、この公民館活動でこのような経験を幾多もした。それもたった三年間で。どれだけ自分の考えが未熟で、どれだけ自分自身に甘えがあるかに気付かされたものであった。

地域づくりに大切なのは人と人との繋がりと云うが、本当これにつきると思う。

この繋がりが確かであれば、様々なことに関して乗り越えることのできる力が育つ。そして夢や将来像を語れる場ができる。そうなる時間はかかっても一歩一歩前へ進むことができる。時には後退したり、身動きもとれなくなることはあるかもしれないが、そんなこと後で考えれば大したことじゃ無いかもしれない。

最近、一住民として地域の行事に参加し、今までとは違った触れ合いや地域づくりの意欲を我が身に感じた。人との繋がりの大切さを少しながらも実感した私は、この経験を胸に、微力ながらも地域づくりに活かしたい。まあ、寄り道も楽しみながら。



「まちづくり活動」への視点



(財)えひめ地域政策研究センター

統括部長 脇 安生

「まちづくり活動」の難しさ

「まちづくり活動」の難しさのひとつは、それぞれの活動自体は特定の人たちによる、特定の場所でのものでありながら、現在という時間、その地域という場所に閉じていないということにあると思います。時間的には過去から将来につながっているものであり、空間的にはその地域の周辺、あるいは遠隔地との相互作用を持っているものだという事です。

時間的な広がりへの意識

地域というものは現在にだけ存在するものではありません。これまで営々として築き上げられてきた歴史を持っていますし、今後展開されるであろう将来もあります。「まちづくり活動」はそのような時間的な広がりの中にあり、過去からの

影響を強く受けていますし、将来にも続いていくものであります。現在の「まちづくり活動」の担い手の方々には主としてその地域に生活されている方々ですが、その方々がこれからもその役割をずっと続けていくということは現実的ではありません。地域の居住者は変化します。もちろん世代交代が行われる訳ですが、それだけでなく地域住民の構成も変わる可能性があります。今そこにおられる方々の家系だけでなく、今は「まれびと」である人が地域の住人になる場合もあり、逆に子孫の方が地域から出て行かれる可能性もあり得ると思います。その地域に関わる人が変化していくことを考えると、我々は我々が受け取った、自然、歴史、文化、産業も含めた地域の資産を次の担い手に渡す必要があります、それをどのようにして次に繋いでいくことが望ましいの

かを考えなければなりません。次の時代の人たちも地域に誇りを持ち「まちづくり」活動を続けていこうと思えるようなものを残していけるかどうかということが大切になります。我々はいわば長い時間の駅伝の一区間を担当している走者のようなもので、受け取った「襷たすき」をきちつと次の時代の人につないでいく必要があります。

地域の資源もまた当然に時間の経過の中で変化をしていきます。それは必ずしもその地域の人々が行う能動的な行為による場合だけではありません。自然空間における生命活動や風化や浸食のような自然現象としての変化もあれば、交通インフラの整備状況やその地域の産業の盛衰がもたらす影響によっても変化していきます。現在の地域の状態は決して固定的なものではありません。

空間的な広がりへの意識

空間的な広がりも意識しなければなりません。今の時代、既に他のエリアからまったく独立して経営されている地域と、いうのはありえません。どの地域も何らかの形で周辺地域、あるいは遠隔地との接点を持っており、それらとの相互作用が常にその地域に影響を及ぼしてきます。情報革命の進展も地域間相互の情報流通を活発化させる要因になっています。その中で「まちづくり活動」もまた、周囲の状況からの影響を受けることになり、既に他の地域の活動との相互交流や、地域外の人を積極的に取り込んだ活動もできています。他の地域の情報が入ってくるとそれが自らの活動を見直す機会となり、自分たちの活動の進め方にとって参考になることもあります。しかし一方で、成功事例が提示されると、その影響を受け、それが生まれた背景や要因、そこに至るプロセスを考慮せず、表面だけをコピーした、ステレオタイプ化した活動になる場合もありそうです。あるいは入ってくる情報を主体的に選択することができず、どうすれば良いか分からなくなったり、言われるままに流されたりする可能性もでてきます。本来、それぞ

れの地域はみな必ず豊かな特徴を持っているものですが、「まちづくり活動」においては地域の個性をどのように捉まえるのか、資源の活用の中でそれをどう際出させていけるかということを常に意識しておかなければなりません。

環境変化への適応

「まちづくり活動」は、このように変化を続ける環境の中にある、生き物のようなものだと思います。周囲の様々な変化に適応していく力がなければ持続させることができません。実際には、現在ある資源を魅力あるものとして維持していくという活動ひとつとっても、これを継続していくということは大変なことだと思います。ただ単純に維持していく努力だけでは環境変化に抗しきれない可能性もあります。今存在しているものはすべて環境変化の洗礼を受けます。「まちづくり活動」は、そのような状況の中で、ある時には今ある地域の資源を維持し、あるいは埋もれていたものを発掘し、場合によっては新たなものを構築していくという連続的な作業であるともいえます。そこでは地域資源の評価を含めた再構築作業を続けていく仕組み作りが作れるかどうかが鍵になります。言ってみれば、

その活動の中に新しいものの創造が行える自己変革のシステムを内包していることが必要だということです。これを実現する最適な方法という一般的な答えはありません。その時々、の担い手が、その時点における状況を前提にして、最善と思われる選択をしつつ進めていかざるを得ません。

グローバリゼーションの時代といわれ、視野を世界に広げることが要請される一方で、自分たちの持っている文化や資産に対する見直しや再評価の動きもできています。あらゆるものを見る視点が多様になってきており、地域の見方も変化してきています。わが国の活性化策検討の中でも、あらためて地域のもつ力がその源泉のひとつであるという議論がなされています。「まちづくり活動」は地域の力を発現させるための重要な要素です。単にこれまでのやり方を延長していくというだけではなく、多様な視点をも柔軟に変化させていくということも考えながら進めていく必要があります。リーダーの役割は依然として重要ですが、参加者一人一人が変化する環境を意識し、その地域をどのように語り、どのように語り続けていけるかということを考えていくことも大切であろうと考えます。

研究員レポート

夕日学入門

研究員 池田 大作

研究員レポートを書くにあたり、「ネタ」がない……。どこぞに研修でも行く機会があったのならばまだしも、当センターへ派遣されて間もない自分には……。と考えていたのだが……。

実は今、博士号を取得するために、講座を受けている。その講座は「夕日学」。数ある講座の中でも、ここまで変てこな講座はないはず！そう思い受講することにした。

講師は県内外を問わず、夕日に關しては日本一?!有名な方、そう双海町の若松進一氏である。

月十日午後一時より始まった。最近の出来事についてから始まり、突如質問。「みなさん。何歳まで生きますか?」いきなり聞かれてもこればかりは困る。受講者は戸惑いながら「〇〇歳まで」「〇〇歳より長生きしたい」「わからない」そんな回答があるなかで氏は、「どう生きるかが問題であり、しっかりと目標を持つて生きていくことが大事。漠然と年をとるようではダメ。」と言った。そして、「人は二つのものさしを持っていきます。変えなければならぬものさしと変えてはいけないものさし。」結局、そのものさしはぐるぐる回っていたら、物事を正確に判断することができないからである。このような、真面目な話を交えつつ、本題に突入した。一問目は、夕日はなぜ赤いのか?。普通、こんなことを聞かれてスラスラ言える人はいないだろう。こんな問題から始まり、夕日の沈むスピードは?など次々に出題された。当然、双海のことを中心に出題されたのであったが、自然環境を捉えた面白い出題であったと同時に夕日に対する思い入れの強さ、深さにただただ驚かされた。

「夕日学」を通じ、楽しくそして真剣に地域づくりについて多少なりとも学べた三時間ではなかったかと思う。という

のも、自分の故郷についてどれだけ知っているだろうか。知っているようで本当は知っていない故郷になっているのではないだろうか?改めて、考えさせられた時間だった。

今回のキーワードは二つのものさし。自分では間違いないと思っけていても、他の人から見れば明らかにおかしいと思われたことあるのでは?ちよつとした時間、今までの自分を振り返りものさしの手入れをしてみてもどうかだろうか。



研究員レポート

「ふるさとづくり2002」
に参加して

研究員 奥山 清司

四月十五日、全国五十八新聞社と地域活性化センターの共催によるシンポジウム「ふるさとづくり2002」が東京のイイノホールにて、自治体関係者ら約七百人が参加し開催されました。

第六回ふるさとイベント大賞表彰式（個性豊かな地域社会を実現する大きな力となることを目指して行われているもの）では、大賞を受賞した岐阜県美濃市の「美濃和紙あかりアート展」をはじめ七つの自治体が、優秀賞、部門賞、特別賞の表彰を受けました。大賞に輝いた「美濃和紙あかりアート展」は全国的に有名な特産品「美濃和紙」を使用したあかり

のアート作品（立体造形）の美しさを競うもので、作品は市の中心市街地であり、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された、江戸時代の情緒が漂う「うだつの上がる街並み」を会場に展示し、秋の夜長、訪れた人を幽玄の美で魅了するイベントです。好評価を得たポイントとして、地域資源をあかりのアートで結び付け、同市の観光と地場産業のPRに成功したこと。作品と展示会場との組み合わせの美しさ、特産品との組合せのユニークさが群を抜いていることで大賞となりました。

基調講演では、ドリームインキュベータの堀紘一社長が、『ひとづくりのコツ』と題し、「現在、日本に元気がないのは、人をつくらうとする努力が足りないからだ」との見解から、社長の一番大事な仕事は人づくりであると指摘した上で、「人は勝手に育たない。必要な知識と経験を与えなくてはいけない。また見聞を広げるチャンスを作ってあげることが大事である」と、十三年に及ぶ社長歴から得た、自らの人づくり論を披露しました。

元気村からのメッセージでは、秋田県鷹巣町における福祉のまちづくりのマンパワー起しについて、MS設計室の松橋雅子氏より紹介がありました。この中で

松橋氏は、「十年程前に町長が代わって町が変わりはじめました。自らが町を歩いて住民と接し、この町に一番必要なものは福祉であると掲げ、理想の福祉とはどんなものなのか、有識者を呼んで懇話会を開きました。その中で、住民自らが問題意識を持つようになりました。そして、ワーキンググループ（住民ボランティアグループ）を結成し、すぐできることから取組みました。始めは、少ない人数でしたが、続けていくうちに、町全体に知られ、思いもよらない協力も得ることができました」と語っていました。鷹巣町のワーキンググループは、自分たちでできることは自分たちです。住民自身が、町の問題を考え、予算化しなければできないことは行政と一緒に考える。といった組織です。今では自らが政策を提案し、ソフト、ハードともに成果をあげ、高齢者が安心して暮らせる町を実現させています。

同シンポジウムに参加して、イベントのあり方について考えさせられました。また、人づくりの大切さを再認識すると共に、地域が活性化するも、沈滞するも、地域リーダーの人づくりへの姿勢と実行にもあるということを改めて感じました。

研究員レポート

ツーリズムで 農村・農業を知る

研究員 橋岡 勝一

これからの農村・農業の持続を考えると、いく上で特に必要なのが、都市の人たちに食や環境など自分たちの生活に関わる農村・農業について知ってもらうこと、また地元の人たちも自分たちの農村・農業を知ることだと思います。その一つの手段として、ツーリズムという滞在・体験型の農村と都市との交流があります。

農作業体験で農業を知る

私は松山で生まれ育った三十代の青年ですが、家は農家じゃなくて、農作業の経験はあまりありません。やったことがあると言えば、ミカンの摘果や収穫ぐら

いです。最近結構そういう方が多いんじゃないかと思えます。

以前、自分から進んで、田んぼの草むきをするイベントに参加しました。恥ずかしながら初めての体験で、作業はあまりうまくできませんでしたが、楽しく、終わった後もとてもすがすがしい気分でした。田んぼの中に素足で入るのがこんなに気持ちいいとは…。小学生の時以来の感動でした。いつも作業されている農家の人が聞いたら怒るかもしれませんが…。

まずは、都市では体験できない場をつくり、農作業・自分たちの地域に興味を持ってもらうことが大切だと思います。そしたら、たびたび訪れる人も出てくると思います。

また、より農業を分かってもらうために、年間を通した農作業体験をやっているとところもあります。作物が育つ経過を体験することは、順調に育つ、収穫を待つ楽しさもあります。農作業の大変さや農作物ができるまでの苦勞も肌で実感することができます。

今春から学校週五日制になり、休日の使い方が話題になっています。親子での農作業体験は、家族のコミュニケーションが図れることはもちろん、農業を通し

て生きる力、思いやりを学ぶいい機会だと思います。

生活の技を知る

また、最近よく思うことは、農村に住んでいるおじいさん、おばあさんは農作物はもちろん、日ごろの生活に必要なものも何でも作れて、自分の力で生きて行けるといことです。ちょっと工夫すれば作れるようなものでも、私だったら作り方を知らないし、スーパーやコンビニですぐ手に入るから買いに行ってしまう。もし世の中のあらゆるものがなくなると、いざ自分の力で生きていけないうことになったら、私は生きていけないかもしれません。

そうしておじいさん、おばあさんが持っている生活や農業の技を次世代に残していくために、農村地域の人たちも、都市の人たちも交流体験できる場をつくることも必要だと感じています。

このような農作業やおじいさん、おばあさんの技を体験しにやって来る、農業・農村に興味を持った都市の人たちが増えてくれば、それだけでも農村地域は活気づくと思います。おじいさん、おばあさんも今まで以上に生きがいを持って元気になると思います。

地域を知る

昨年、熊本県小国町の九州ツーリズム
大学で知り合った熊本県五木村の黒木晴
代さんの農家民宿に伺いました。

黒木さんは、二十年來の夢だった農家
民宿を平成十二年から始めました。自宅
のまわりで米やきび、野菜などを作りな
がら経営しています。知り合いからの紹
介や口コミなどで、山口や大阪からもお
客さんが来ているそうです。

農作業体験ができ、黒木さんは「九州
ハイランド観光ガイドインストラク
ター」でもあるので村内の案内もしてい
ただけるのですが、五木村に着いたのが
遅くなり、夕食と宿泊だけになってしま
いました。

夕食は、そこで採れた野菜はもちろん、
ご主人が獲ってきたシカやイノシシ、ア
ユなど、盛りだくさんの料理を出してい
ただきました。中でも、山に生えていた
岩のりと五木村の名物「山うにどうふ」
は初めてで、「これは珍味」とおいしく
いただきました。

黒木さんは食事の時の会話を大切にさ
れていて、五木村の自然や全国区になっ
た「五木の子守唄」の悲話、村の中心部
がダムの底に沈むという川辺川ダムの話

などをお聴きしました。その五木村の厳
しい現状を真剣に考えておられる話から、
黒木さんは熊本県の北部から嫁がれて来
ましたが、五木村をよく知り、本当に愛
しているんだなあと感じました。

短い時間でしたが、のんびりした時間、
落ち着ける空間を体感し、五木村のこ
とを少し知ることでもでき、親戚の家に来た
ような気分になりました。また行きたい
と思います。

※

※

ツーリズムをやっていく上で一番大事
なことは、無理をせず、ありのままに、
楽しくやることだと思えました。地域の
ことをよく知り、都市へ情報発信するこ
とも大切です。

最近消費者の食料への不信が高まっ
ています。食料への信頼を取り戻すため、
日本の農村・農業の持続のために、ツー
リズムなどの方法で、まず農村と都市が
お互いに理解し合うことから始めないと
いけないと感じています。



▲黒木さんの農家民宿



◀中央が黒木さん

“MY TOWN” うおっちゃんぐ

歩キ目デス & 足ラテス

第20弾

近代化遺産シリーズ

「佐田岬の青は緑錆か!?’

ろくしょう



岡崎 直司

近代化遺産については概ね四分類がある事については先に述べた。その中で、分かり易さから言うと、近代洋風建築などと呼ばれる洋館、あるいは西洋建築がイメージされる。

しかし、どちらかと言うと、近代化遺産と言うべきものの真骨頂は、実は土木や産業分野に対する文化的視点である。何故なら、近代は産業革命を抜きにしては考えられず、そうした産業の変革が大潮流となって押し寄せた結果としての文化遺産なのだ。

日本の場合は、長い鎖国の時期を経て、開国した時期と重なり、また権力構造が徳川から明治新政府へドラマティックに転換した。従って津々浦々へ急激な西洋

化の波が押し寄せた為に、それまでの和の世界が急速に洋風化した。その意味で、生活様式の大変革をもたらした明治という時代は、欧米諸国と較べても、突出した変化のターニングポイントだった。ひよっとすると、身の回り全てのもものが洋風に変化するスピード感というのは、現在の想像をはるかに越えるものだったのかも知れない。

さて、話を戻そう。着々と新しい産業が創出、拡大する中でも、特に鉱山開発の分野は我が愛媛県にとって大きな比重を占めていた。有名な住友家の興した別子銅山は言うまでもないが、他にもあまたの諸鉱山があった。前置きが長くなったが、佐田岬半島域について述べてみよう。

ある時期まで、この半島は知る人ぞ知る大銅山半島だった。日本一細長く海に突き出し、瀬戸内と宇和海

三崎町・三崎精錬所跡



載写真位置図





八幡浜市佐島 鑊からみで出来た黒砂海岸



伊方町・女子岬精錬所

を分ける峰々は、銅で出来たサーベルだった、と思えば解り易い。その位この地域は鉱山で活況を呈した。その証拠がアチコチに残っている。

まず、昨年の調査で明らかになった三崎精錬所跡の姿（写真①）。明治三十年代頃のものだとされるが、山中に並ぶ初期製錬の焼鉱窯の石積み景観には圧倒される。緑泥片岩を一つ一つ積み上げ、アー

チ形状の嵐口と呼ばれる開口部が規則的に数段並んでいる。煙害により、周辺漁民がこの精錬所を襲い、閉鎖に追い込んでから百年を越える歳月が経過している。堅牢な石積みをも所々崩しつつある雑木

が、その時間を静かに語っている。場所は、三崎町井野浦にある阿弥陀池から歩いて二、三〇分かかる所。

半島域には、この他に二ヶ所の中心的な精錬所があった。一つは伊方町女子岬（写真②）、もう一つが八幡浜市沖に浮かぶ佐島の精錬所。先程の三崎精錬所も女子岬製錬所も海岸には製錬滓かすである鑊からみが打ち捨てられてあるが、佐島の場合はより強烈



八幡浜市・今出銅山跡
地元の人たちと吹き床の前で



保内町・大峰銅山坑口

島の南に伸びている。しかも砂浜はその鑊で出来た黒砂海岸の様相を呈している（写真③）。観光地ハワイには、有名なマウナロアやキラウエアなどの活火山があり、黒砂海岸として観光名所となっているが、この場合、百年程で人為が造形したビーチが登場した格好。

この他、宇和島藩政期から開発され、二百四十年程の歴史を刻む、八幡浜市日土にある今出銅山跡（写真④）や、最盛期には四国で別子銅山に次ぐ出鉱量を誇った保内町の大峰銅山跡（写真⑤）、あるいは同町文化財となっている数段の石積み焼鉱窯や吹き床の見られる柳谷銅山跡など、枚挙にいとまが無い。やはり、佐田岬・銅のサーベル説は正しい。



な印象での台地が

● 嬢のくにフラッシュ ●

歌 磨 館

肱 川 町

江戸時代の美人画版木の第一人者と言われる浮世絵師・喜多川歌磨の版木2枚が肱川町の民家で見つかったから4年。その版木はもちろん、それを復元した作品「狐釣之図(きつねつりのず)」などを常設展示する歌磨館が3月にオープンしました。

常設展示室には版画や版木、道具類などが展示され、復元までの歩みや刷り上げ工程を分かりやすく紹介しています。また、歌磨を世に出した、浮世絵を売る絵草子屋「蔦屋耕書堂」の店先を復元したり、浮世絵や歌磨の資料も展示されています。

なお、歌磨館は肱川町郷土文化センターの一部で、隣には風の博物館があります。

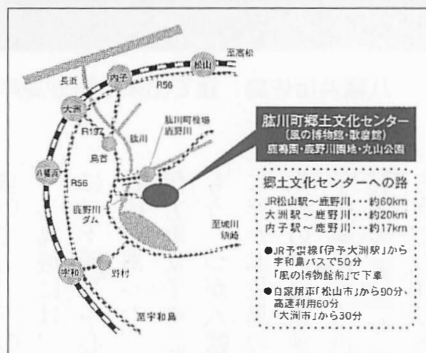
歌磨作品を見ることで、江戸時代の代表的浮世絵師のさまざまな色使いとその時代のすばらしい技術、美術力をお楽しみください。

◀営業時間▶ 午前9時～午後5時

◀休館日▶ 毎週火曜日(祝日の場合はその翌日)

◀入場料▶ 一般500円・小中高生250円(風の博物館と共通)

◀問い合わせ先▶ 肱川町郷土文化センター TEL (0893) 34-2181

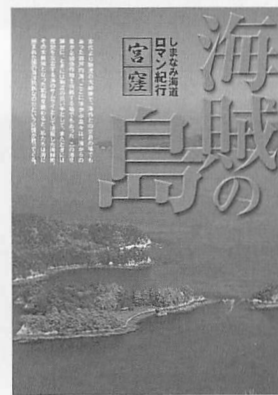


● しまなみ海道ロマン紀行・宮窪「海賊の島」

アトラス出版 編 1, 425円(税別)

古代より物流の大動脈であった瀬戸内海で、最も島が密集している芸予諸島。激しい潮流が渦巻くその海域は、三島村上氏と呼ばれた因島、能島、来島、海賊衆が活躍したところであり、日本の水軍の発祥地と言える。

この本では、本家の能島村上家の貴重な資料をカラー写真で紹介し、「海賊とは何か」をテーマにした特集や第36代能島村上家頭領の村上公一氏のロングインタビューなどを掲載している。また、大島石・宮窪杜氏を通して見た宮窪町の暮らしや文化、潮流体験・漁師市等の最新観光情報なども収録。



Information まちセンからのお知らせ

☆政策研究セミナー開催

当センターでは、みなさまへの情報提供として、政策研究セミナーを開催しています。

今回は、「これからの地域産業振興のあり方」をテーマに、一橋大学大学院商学研究科教授の関 満博氏をお迎えして開催することになりました。奮ってご参加ください。

- テマ：「これからの地域産業振興のあり方」
- 講師：関 満博（一橋大学大学院商学研究科教授）
- と き：平成14年7月25日（木） 13：30～15：30
- と ころ：テクノプラザ愛媛 1Fテクノホール（松山市久米窪田町）
- 定 員：200名（申し込み先着順）
- 会 費：無料
- 共 催：（財）えひめ産業振興財団
- 問い合わせ：（財）えひめ地域政策研究センター 企画研究部門 セミナー係

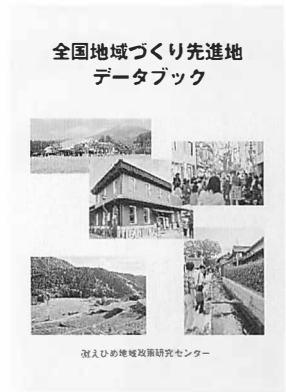
TEL 089-945-4100

☆センターからの発行物

地域づくり活動を実践されているみなさんに少しでもお役に立てばと作りました。ご希望の方は、送料実費にておわけします。

●『全国地域づくり先進地データブック』

全国の地域づくり先進地54市町村を紹介した「地域づくり先進地紹介」と昨年度実施した「地域づくり活動者研修交流会」でのフリージャーナリスト・亀地宏氏の講演記録を掲載。また、付録として「行ってみたい先進地」と「日本の町並・集落―重要伝統的建造物群保存地区―」を収録。B5版



BOOK INFORMATION

●逆境をバネに輝く法 ―スモールプレイヤー成功法―

宮崎文隆 編集

ぎょうせい

1,905円（税別）

広島県北地域で「過疎を逆手にとる会」が発足して20年。昨年からは新たに「逆手塾」に名称を変更し、逆境をバネにして輝く、地域づくり、ものづくり、人づくりに挑戦しつづける“オンリーワンのまちづくり”活動をこの本で大公開。

全国のユニークな活動の紹介や目からウロコのアイデア、地方分権の実現、地域の自立のためのヒントが盛りだくさん。逆手流の、とにかく前向きに、逆発想で切り抜ける力、輝いて生きる勇気と知恵が身につく、田舎暮らしの中で人間らしく生きることを再認識させてくれる一冊。



お知らせ (財団法人 愛媛県市町村振興協会)

市町村振興 (サマージャンボ) 宝くじが1枚300円で発売されます。

『今年のサマージャンボ宝くじは、1等・前後賞合わせて3億円』

『2等も1億円』

1等 2億円×43本 前後賞 各5,000万円 2等 1億円×129本

この宝くじの収益金は市町村の明るく住みよい街づくりに使われます。

サマージャンボ宝くじ
1等前後賞合わせて3億円
2等1億円



7/22月発売
7/22日(金)抽せん日(祝)

財団法人全国市町村振興協会 / 全国市長会 / 全国町村会 / 全国市議会議員会 / 全国町村議会議員会

前ページで紹介した『全国地域づくり先進地データブック』に亀地宏氏の講演記録を掲載していますが、講演の後行われた亀地氏と内子町の岡田文淑氏の対談については編集上の都合により、掲載できませんでした。

誌面を通じて、ご協力いただいた両氏にお詫びします。

だんだん暑くなって来ますが、みなさん体調に気をつけて、この夏を乗り切ってください。(橋岡)

内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』編集係までお寄せください。

〒790-0003

松山市三番町四丁目十番地一

愛媛県三番町ビル二階

(財)えひめ地域政策研究センター

まちづくり活動部門

(まちづくりセンターえひめ)

TEL089(932)7750

FAX089(932)7760

発行/平成十四年七月五日

(財)えひめ地域政策

研究センター

印刷/三創印刷株式会社

☆ <http://www.ecpr.or.jp>

☆ E-mail:info@ecpr.or.jp

本紙は、(財)愛媛県市町村振興協会の委託を受けて発行しています。